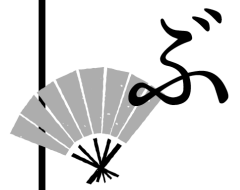


古典落語



に学



落語家

立川談四楼

第二十六回 権兵衛狸

山奥

に権兵衛さんという床屋が住んでいた。山奥
なので人口が少なく床屋だけでは食えません。

農業も営んでいます。半豊半床”というやつですね。

先年、女房を亡くし、一人娘は里に嫁いだ。その娘が月に一度ばかり、孫を連れてやってくるのが権兵衛さんの何よりの楽しみです。

床屋は、今でいうサロンです。仕事を終えた村人が何人か集まり、手作りの酒を飲んでいろいろ話をします。これも権兵衛さんの楽しみの一つで、やがて村人が三々五々帰ってゆく。権兵衛さんは煎餅布団に柏餅。うとうととしかけると表の戸が叩かれ、「権兵衛、こんべえ」

「誰だ、忘れもんでもしたか。ドンドン叩くでねえ、いま開けるから」

開けるが誰もいない。月が出ているだけ。

「ははあ、朧月夜だ。これは山の狸が悪さをぶちに来ただな。今度来たら見ていやがれ」

翌日

も同じことが繰り返され、権兵衛さんがうとうとすると表の戸が叩かれ、「権兵衛、

こんべえ」来やがったなと権兵衛さん、そうと戸に近づくと狸が戸を叩くのは尻尾ではありません。後頭部の固いところで後ろ向きになって叩くんだそうです。ここで私の一門は「後頭部（江東区）深川」というダジャレを言います。

ドンドンに合わせ、権兵衛さんはヒョイと戸を開ける。目標を失った狸は後ろに引っ繰り返り、家の中に転がり込んでくる。

「このヤロ」

「イテ」

「何が痛えだ」

「イテイテ」

格闘すること十数分。ついに権兵衛さんは狸を縛り上げ、天井から吊るしてしまいます。

翌朝

、茶を飲みに行った村人が茶碗の中に毛が落ちてくるのに気づき、天井を見上げて驚く。

「権兵衛さん。これは何だね」と。

「狸が悪さをぶちに来た。だから懲らしめたところだ」

「肥えたい狸だね。これは皮を剥いで狸汁にして食うべえよ。食うべえよ」

「いや、今日は死んだ女房の祥月命日（故人が亡くなった月のこと）だ。殺生（せつしょう）はよくねえだ」

これを聞いた狸はホッと一安心。

「食われちまうところだったぞ。殺さねえ代わりにこうしてやるべえか」

さすがは床屋。権兵衛さんは狸の頭をきれいに剃り上げ、クリ坊主にする。

「いいか。悪さをぶちたくなったら手を頭に乗けて、どうし

てこういう頭になったかを考えろ。さ、山へ帰えれ」

狸は少し歩いては権兵衛さんを振り返り、少し歩いては振り返りして山へ帰ってゆく。翌日から夜は権兵衛さんの独演会だ。狸がどんな悪さをし、どう格闘して縛り上げ、懲らしめ、そして命を助けてやったことを滔々と語ります。命を助けるのはいことだと。

そんなある晩、村人が帰り、権兵衛さんがうとうとすると、表の戸がドンドン。「権兵衛さん、権兵衛さん」

「あれ、ヤローまた来やがっただな。前は権兵衛、こんべえと呼び捨てだったのに、今度は権兵衛さんとさん付けた」

権兵衛さんがガラッと戸を開けると、狸がヒョイと顔を出し、「親方、今度は髭を当たってくんねえ」

これが

権兵衛狸ですが、髭を当たるって分かります？ 「髭を剃る」の「剃る」は「す

る」とも読み、するはカネを使って無くすという意味で、逆の当たると表現して験を担いでいるのです。ほら、スルメをアタリメと言うでしょう。硯箱（すずりばこ）を当たり箱と言うのもそうですね。その他にも随分とあります。摺鉢（すりばち）を当たり鉢と言います。ですから、すりこぎ棒は当たり棒ということになります。でもスリッパを当たりスリッパとは言いませんので念のため。

権兵衛狸は牧歌的な味わいがあり、どこか民話的でもありません。演じ手のとても多いネタでもあります。